

EP 29625 (9) a)

EUROPEAN PATENT OFFICE

Patent Abstracts of Japan

PUBLICATION NUMBER : 06148661
PUBLICATION DATE : 27-05-94

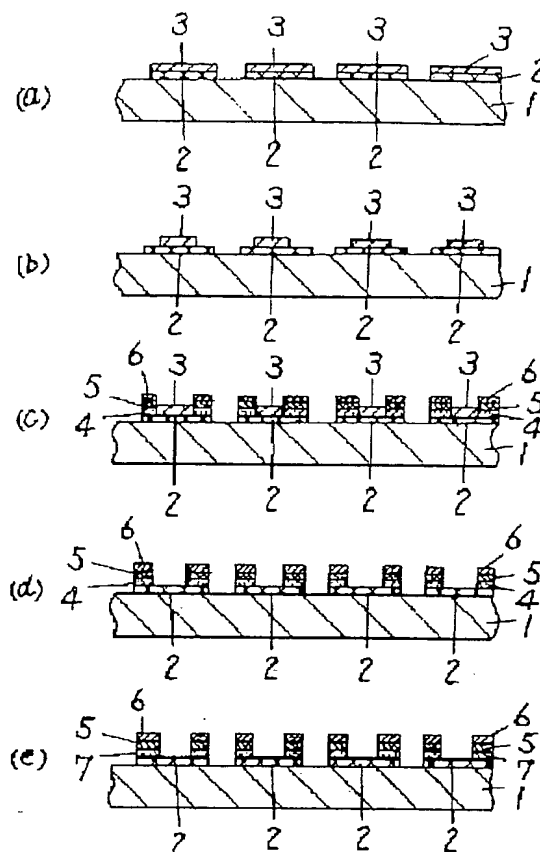
APPLICATION DATE : 12-11-92
APPLICATION NUMBER : 04301957

APPLICANT : MATSUSHITA ELECTRIC IND CO LTD;

INVENTOR : MITAMURA SADA0;

INT.CL. : G02F 1/1343 G02F 1/13 G02F 1/1333

TITLE : PRODUCTION OF SUBSTRATE FOR
DISPLAY DEVICE



ABSTRACT : PURPOSE: To provide the method for improving a display grade.

CONSTITUTION: ITO 2 is finely worked by hydriodic acid and a substrate is heated to shrink a photoresist 3; further, the exposed parts of the ITO 2 from the resist 3 are washed by the ozone generated when the resist is irradiated with UV rays. An indium electroplating 4 is then formed on the ITO by a soln. prepd. by dissolving indium sulfate and sodium sulfate in pure water. The substrate is then washed thoroughly and the electroplating of copper 5 is executed thereon by a soln. of an acidic copper sulfate system. A gold layer 6 is further formed thereon by an electroless plating liquid of gold. The resist 3 is peeled by an org. solvent and the substrate is washed and dried. The substrate is thereafter heat-treated.

COPYRIGHT: (C)1994,JPO&Japio

BEST AVAILABLE COPY

THIS PAGE BLANK (USPTO)

EP29625 (9) b)

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平6-148661

(43) 公開日 平成6年(1994)5月27日

(51) Int. Cl. ⁵	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
G 0 2 F	1/1343	9018-2K		
	1/13	1 0 1		
	1/1333	5 0 0		
		9315-2K		
		9225-2K		

審査請求 未請求 請求項の数4 (全 5 頁)

(21) 出願番号 特願平4-301957

(22) 出願日 平成4年(1992)11月12日

(71) 出願人 000005821

松下電器産業株式会社

大阪府門真市大字門真1006番地

(72) 発明者 山添 博司

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器
産業株式会社内

(72) 発明者 三田村 貞雄

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器
産業株式会社内

(74) 代理人 弁理士 小鍛冶 明 (外2名)

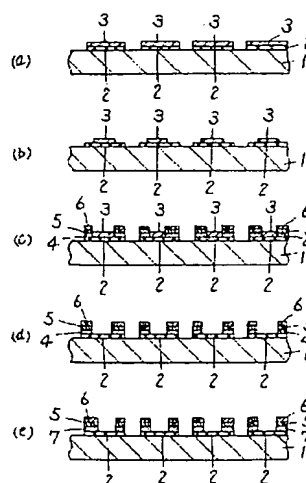
(54) 【発明の名称】 表示装置用基板の製法

(57) 【要約】

【目的】 本発明は、表示品位を向上させるための方法を提案するものである。

【構成】 沃化水素酸で、ITO2を微細加工し、基板を加熱し、フォトレジスト3を縮ませ、さらに、紫外線を照射し、発生するオゾンにより、ITO2のレジスト3からの露出部を洗浄し、硫酸インジウムと硫酸ナトリウムを純水に溶解させた溶液で、インジウム電気鍍金4をITO上に形成する。次に、よく洗浄し、酸性の硫酸銅系の溶液で、この上に、銅5の電気鍍金を行い、さらに、金の無電界鍍金液により、この上に金層6を形成し、レジスト3を有機溶剤で剥離し、洗浄、乾燥させ、この後、基板を熱処理する。

1 ガラス基板
2 ITO
3 フォトレジスト
4 インジウム金属
5 銅
6 金



【特許請求の範囲】

【請求項1】基板の主面全面に亘る透明電極の上に、所望の状態にパターン化されたレジスト膜を形成し、透明電極の腐食液で微細加工をし、洗浄し、次に前記レジスト膜を縮ませ、透明電極の露出部をオゾンまたは酸素プラズマで清浄化し、透明電極の露出部にインジウム電界鍍金を施し、更に、この上に、銅単層電界鍍金または、金単層電界鍍金または、銅電界鍍金と金の電界または無電界鍍金の2層鍍金をこの順に施し、洗浄、乾燥させ、レジスト膜を除去、洗浄、乾燥させ、その後、熱処理することを特徴とする表示装置用基板の製法。

【請求項2】基板の主面全面に亘る透明電極の上に、所望の状態にパターン化されたレジスト膜を形成し、透明電極の腐食液で微細加工をし、洗浄し、次に前記レジスト膜を縮ませ、透明電極の露出部をオゾンまたは酸素プラズマで清浄化し、透明電極の露出部にニッケル電界または無電界鍍金を施し、更に、この上に、銅単層電界鍍金または、金単層電界または無電界鍍金または、銅電界鍍金と金の電界または無電界鍍金の2層鍍金をこの順に施し、洗浄、乾燥させ、レジスト膜を除去、洗浄、乾燥させ、その後、熱処理することを特徴とする表示装置用基板の製法。

【請求項3】パターン化されたレジスト膜を、熱的效果により縮ませることを特徴とする請求項1または2記載の表示装置用基板の製法。

【請求項4】パターン化されたレジスト膜に、オゾンまたは酸素プラズマを照射することにより、前記レジスト膜を縮ませることを特徴とする請求項1または2記載の表示装置用基板の製法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、液晶表示装置等、表示装置用基板の製法に関する。特に電極の抵抗を一段と下げることに関する。

【0002】

【従来の技術】液晶表示装置等、表示装置は、マン・マシーン・インターフェースとしては、是非必要となる技術である。特に、最近、コンピューター端末等において、ダウン・サイジングの意味からも、液晶表示装置は必須となってきた。

【0003】電気抵抗値、生産時の制御性、膜の均一性、光の透過率、微細加工性等の点から、産業的には、圧倒的に、インジウム-錫の酸化物（いわゆるITO）が使われている。

【0004】この技術内容は、「薄膜ハンドブック」、日本学術振興会第131委員会 編、オーム社刊に詳しい。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】最近、コンピューター端末等に使われる液晶表示装置において、高品位表示の

要求が現実のものとなってきた。これらの液晶表示装置においては、STN等、単純モードの液晶表示装置が主に使われている。これらの液晶表示装置には、表示において、クロストーク現象等、表示の質の低下が見られるが、現状では仕方なく使われている。

【0006】この現象は、透明電極（ITO）の電気抵抗値が十分、低くなく、従って、CR時定数が多いことに起因する。現在の技術では、ITOの比電気抵抗率は、 $2 \times 10^{-4} \Omega \cdot \text{cm}$ 程度までしか、達成されていない。ちなみに、金や銅、アルミニウムの比抵抗率は、 $2 \times 10^{-6} \Omega \cdot \text{cm}$ 程度である。

【0007】ところが、金や銅、アルミニウムをITOに接して配線された（いわゆる補助電極）基板の開発がなされているが、この場合、ITOや基板への接着強度の欠如が問題となる。

【0008】また、この補助電極形成のコストは出来るだけ、低減させることが要求される。例えば、フォトリソグラフィ法及び蒸着プロセスを用いた方法は、確実なものであるが、コストが高く、とても一般に使われる方法とは考えられない。

【0009】また、この問題は、強誘電性液晶表示装置においてもあてはまる。

【0010】

【課題を解決するための手段】本発明は前述のような課題を解決するために、基板の主面全面に亘る透明電極の上に、所望の状態にパターン化されたレジスト膜を形成し、透明電極の腐食液で微細加工をし、洗浄し、次に前記レジスト膜を縮ませ、透明電極の露出部をオゾンまたは酸素プラズマで清浄化し、透明電極の露出部にインジウム電界鍍金を施し、更に、この上に、銅単層電界鍍金または、金単層電界鍍金または、銅電界鍍金と金の電界または無電界鍍金の2層鍍金をこの順に施し、洗浄、乾燥させ、レジスト膜を除去、洗浄、乾燥させ、その後、所望の温度プロファイルで、所望の最高温度まで熱処理するような表示装置用基板の製法を提供するものである。

【0011】本発明はさらに、基板の主面全面に亘る透明電極の上に、所望の状態にパターン化されたレジスト膜を形成し、透明電極の腐食液で微細加工をし、洗浄し、次に前記レジスト膜を縮ませ、透明電極の露出部をオゾンまたは酸素プラズマで清浄化し、透明電極の露出部にニッケル電界または無電界鍍金を施し、更に、この上に、銅単層電界鍍金または、金単層電界または無電界鍍金または、銅電界鍍金と金の電界または無電界鍍金の2層鍍金をこの順に施し、洗浄、乾燥させ、レジスト膜を除去、洗浄、乾燥させ、その後、熱処理するような表示装置用基板の製法をも明かにする。

【0012】なお、パターン化されたレジスト膜を、熱的效果により縮ませるか、オゾンまたは酸素プラズマを照射することにより、前記レジスト膜を縮ませるの

が、望ましい。

【0013】

【作用】まず、基板への接着力、具体的には、ITO並びに、ガラス質基板表面への接着力は、インジウムないし、インジウム合金が付着力が良好である。この現象は、ガラス用ハンダ等で実証されている。また、特に銅や金はその貴金属性の故に付着力は極めて乏しい。ITO並びに、ガラス質基板表面への接着力の強い金属としては、他に、ニッケルがある。クロムもそうであるが、
30 鍍金技術の困難さは尋常でない（クロム鍍金技術は、勿論、あるが）。

【0014】また、インジウムは、水溶液を使った、電気鍍金で可能である。インジウムを析出させるため、物理的析出法を使う必要がない。物理的析出法は、蒸着機やスパッター装置等、高価な設備が必要である。もちろん、インジウム金属は、蒸着等、物理的手法でも析出可能であるが、ニッケルは、もっとも鍍金し易い金属であり、電気鍍金や、ITO上への選択鍍金も可能である。

【0015】電気抵抗は、銅、や金を使用することにより、最も理想的に下がる。また、プロセス的に、ITOの微細加工（これは、従来なされるプロセスである）に、若干のプロセスを追加することにより、より低抵抗の電極を得るのが望ましい。これが、以下の提案である。すなわち、基板の主面全面に亘るITOの上に、
30 所望の状態にパターン化されたレジスト膜を形成し、ITOの腐食液で微細加工をし、洗浄し、前記レジスト膜をシュリンクさせ、ITOの露出部を招来させ、次にこのITOの露出部にインジウム鍍金ないしニッケル鍍金を施し、更に、この上に、銅鍍金ないし、金鍍金をなし、洗浄、乾燥させ、レジスト膜を除去、洗浄、乾燥させ、この後、所望の温度プロファイルで、熱処理することである。なお、銅鍍金の場合、耐腐食性の意味から、鍍金された銅の表面に無電界金鍍金を行うのも、望ましい。最後の熱処理は、基板への付着力を高めること、さらに、インジウム鍍金を行った場合は、銅や金とインジウム合金を形成させ、耐熱性を向上させることもねらいである。

【0016】これでは、ITO電極の検査も一度で済む。最後の熱処理は、下地金属インジウムと銅、あるいは金の一部の合金反応を進めるためと、基板と前記合金との接着力を向上させる意味もある。下地金属がニッケルの場合も、これで接着力の向上が図れる。

【0017】なお、前記積層導体において、インジウムないしインジウム合金ないしニッケルの層は基板への付着力にのみ寄与するものであり、電気抵抗を下げるには卓効はない。従って、付着力さえ、満足出来れば、銅や金からなる層の体積は、前記層に比べて、大であるべきである。

【0018】

【実施例】以下、本発明の実施例を説明する。ここで
50

は、単純型のマトリクス表示装置について述べる。しかし、この実施例は基本的には、EL表示装置等にもあてはまるものである。

【0019】（実施例1）（図1）に従って説明する。構成断面図、（図1）において、1はガラス基板、2はITO、3はフォトリソ、4はインジウム金属層、5は銅層、6は銅層の表面の金属層、7はインジウム-銅の合金からなる層である。

【0020】ITOを主面全面に有するコーニング社製#7059ガラス基板1を入手した。東京応化製ポジレジスト、OFPRを使い、公知のフォトリソグラフィ法でもって、（図1）（a）の如く、レジストパターン3を作った。次に、O2アッシャーで、処理した。さらに、公知の方法で、沃化水素酸で、ITOを微細加工した（図1）（a）。

【0021】次に、約150℃以上に基板を加熱し、フォトリソを縮ませた。さらに、紫外線を照射、発生するオゾンにより、ITOのレジストからの露出部を洗浄した（図1）（b）。

【0022】硫酸インジウム、約60グラムと、硫酸ナトリウム、約10グラムを約1リットルの純水に溶解させた溶液で、約0.1ミクロンの厚みのインジウム電気鍍金をITO上に行う。次に、よく洗浄する。更に、酸性の硫酸銅系の溶液で、この上に、約2ミクロンの厚みの銅の電気鍍金を行った。さらに、市販の金の無電界鍍金液により、この上に約0.2ミクロンの金属層を形成した（図1）（c）。

【0023】レジストを有機溶剤で剥離し、よく洗浄し、乾燥させ、（図1）（d）を得た。

【0024】この後、約150℃まで、徐々に昇温し、最終ときには約260℃まで、昇温させ、基板を熱処理した。この時、インジウム金属層は、インジウム-銅の合金層になっているのが、オージェ電子分析によって明らかになった。かくて、（図1）（e）を得た。これら、鍍金層のITOへの付着力は実用に耐えるものであった。

【0025】ITO電極のシート抵抗は、約1桁下がっていた。通常の如く、この基板に、ポリイミド膜を形成し、をレーヨン繊維を用いて、ラビング処理を行った。このような2枚の基板を、ITO膜が対向するように、
40 間隙が7.0ミクロンとなるように、貼り合わせ、この間隙にSTN用ネマティック液晶組成物を充填した。クロストークは、ほとんど無く、コントラストも約50%上昇した。

【0026】（実施例2）（図2）に従って説明する。構成断面図、（図2）において、8はガラス基板、9はITO、10はフォトリソ、11はニッケル金属層、12は金属層である。

【0027】ITO9を主面に有するコーニング社製#7059ガラス基板8を入手した。東京応化製ポジレジ

5

ストを使い、公知のフォトリソグラフィ法でもって、
 (図2) (a) の如く、レジストパターン10を作った。次に、O₂アッシャーで、処理した。次に、市販の塩鉄溶液でITOを微細加工して、(図2) (a)を得た。

【0028】次に、基板をドライエッチャーで、約20分、酸素プラズマに晒す。かくして、レジストの端部は、一般に、酸素プラズマによるレジスト材料の分解がより速いことにより、実質上、フォトレジストを縮ませた効果が発生する。すなわち、清浄なITOのレジストからの露出部が得られる(図2) (b)。

【0029】次に、市販の薬品を用い、前記露出部にのみ、選択的に、約0.5ミクロンのニッケル電気鍍金を行った。この時、析出速度の制御は、ニッケル層の膜剥がれを防ぐため、非常に重要である。さらに、金の電界鍍金液により、約1.5ミクロンの金層を得る(図2) (c)。

【0030】レジストを有機塩素系溶剤で剥離し、よく洗浄し、乾燥させ、(図2) (d)を得た。

【0031】この後、基板を約100℃で熱処理した。これら、鍍金層のITOへの付着力は実用に耐えるものであった。

【0032】ITO電極のシート抵抗は、約1桁下がっていた。通常、この基板に、ポリイミド膜を形成し、をレーヨン繊維を用いて、ラビング処理を行った。

6

このような2枚の基板を、ITO膜が対向するように、間隙が7.0ミクロンとなるように、貼り合わせ、この間隙にSTN用ネマティック液晶組成物を充填した。クロストークは、ほとんど無く、コントラストも約40%上昇した。

【0033】

【発明の効果】以上本発明は、表示装置の表示品位の向上を実現するに有力な方法を提供するものであり、産業に貢献するところ大である。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の実施例を説明するための構成断面図

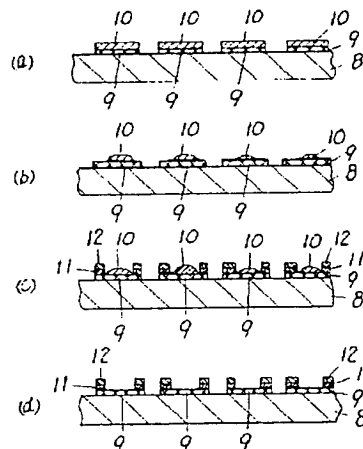
【図2】本発明の実施例を説明するための構成断面図

【符号の説明】

- 1 ガラス基板
- 2 ITO
- 3 フォトレジスト
- 4 インジウム金属層
- 5 銅層
- 6 銅層の表面の金層
- 7 インジウム-銅の合金からなる層
- 8 ガラス基板
- 9 ITO
- 10 フォトレジスト
- 11 ニッケル金属層
- 12 金層

【図2】

- 8 基板
- 9 ITO
- 10 フォトレジスト
- 11 ニッケル
- 12 金

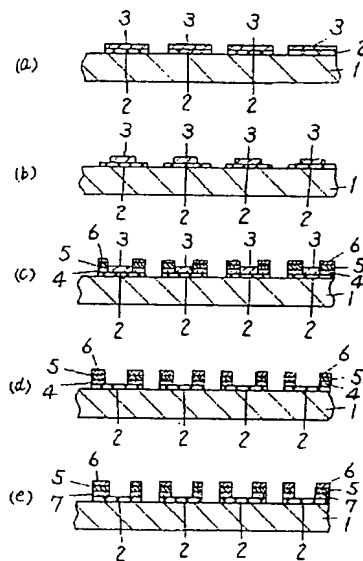


(5)

特開平6-148661

【図1】

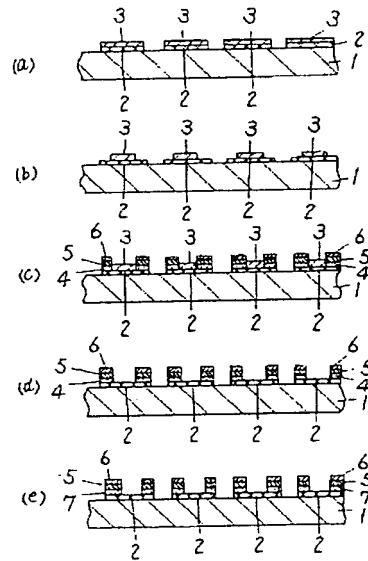
- 1 ガラス基板
- 2 ITO
- 3 フォトリソグ
- 4 インジウム金属
- 5 銅
- 6 金



BEST AVAILABLE COPY

【図1】

- 1 ガラス基板
- 2 ITO
- 3 フォトリソグ
- 4 インジウム金属
- 5 銅
- 6 金



BEST AVAILABLE COPY